

〔研究論文〕

インスティテューショナル・エスノグラフィーとは何か
－ *Simply Institutional Ethnography* を読む (2) －

上谷 香陽

〔Article〕

**What is Institutional Ethnography?:
Reading *Simply Institutional Ethnography*. (2)**

Kayo UETANI

Abstract

This paper examines *Simply Institutional Ethnography: Creating a Sociology for People* by Dorothy E. Smith and Alison I. Griffith and attempts to clarify what Institutional Ethnography(IE) is. This book is the final work of D. E. Smith, who passed away in June 2022. Although this book was co-authored with Griffith, the content of the book allows readers to grasp the basic ideas of Smith's sociology, which she had expressed in her own monographs. This paper reads and analyzes this book, drawing on Smith's discussions in her previous monographs, in order to clarify the basic idea behind Smith's IE.

The book consists of 11 chapters, but this paper will focus on chapters 4 and 6 of Part II. The concepts taken up in Part II--discourse, work, and text--are considered to be useful for the initial dialogue with IE's inquiry, which aims to learn from actual people about what they do. Smith and Griffith emphasize that these concepts, found useful in their inquiry by IE researchers, do not serve a theoretical function. These concepts should not be used to explain or formulate what is being learned from talking to people or from observation with people. The concepts introduced in Part II serve as guiding principles directing the researcher's attention toward the aspects that IE researchers should focus on. Chapters 4 through 6 describe how IE researchers have used these concepts and the possibilities these concepts have opened up, along with examples of IE research.

In the initial dialogue in order to develop ethnography, IE researchers are required to obtain concrete, detailed and elaborate accounts. This is because the more we learn about an individual's specific experiences, the better we will be able to recognize how what is being said implies social relations beyond the specific setting. Discourse, work, and text, which are considered to be "useful concepts" for IE, serve as tools for directing the attention of the researcher in the initial dialogue toward aspects of what people are doing that may unnoticed or unrecognized, but which coordinate their actions with each other.

1. はじめに

本稿は2022年に出版された、Dorothy E. SmithとAlison I. Griffith著*Simply Institutional Ethnography: Creating a Sociology for People*を考察し、Institutional Ethnography(以下IE)とは何かを明らかにしようとする一連の論考の第2部である⁽¹⁾。本書はGriffithとの共著であるが、これまでSmithが自らの単著で述べてきた彼女の社会学の基本的な考え方が把握できる内容になっている。本稿では、この本を、Smithのこれまでの単著での議論に依拠しながら読み解くものである。

前稿(上谷 2023)でも述べたように、IEにおけるinstitutionとは、第一義的には、人々の日常生活に深く関与している、教育や医療や行政や経営や法律や学問などに関わる公式の組織や機関や施設などのことである。ただしそれは単に実体的な個別の組織を指すのではなく、相互依存的に関連する複合体を成し、複数の人々の行為が連鎖し連係する(coordinate)社会諸関係の交差点として捉えられている。SmithのIEにおいてinstitutionやinstitutionalという用語は、人々の諸行為の連鎖や連係のあり方を一般化し、その様式を繰り返し再生産する進行中のメカニズムを示唆するものである。institutionをこのような水準で捉えることは、「人々の日常的な経験である局所的な世界の中から発展し、局所的な場を横断して人々の活動を連係する社会関係や社会的組織化を探索し、私たちの日常生活に深く関わっている権力の作動を解明していく」ことを目指す、IEの社会学的探究のあり方と深く結びついている。「機関」「制度」などの日本語に翻訳すると誤解を招く恐れがあるため、前稿に引き続き本稿でも英語のまま表記する。

この本は全11章で構成されており、本稿では、第2部「役に立つ概念」の第4章「言説」、第5章「ワーク」、第6章「テキスト」を取り上げる。

前稿で述べたように、IEの探究は、対話的な特徴を有しており、二つの対話の連鎖としてのエスノグラフィーを開発する。第一の対話は、ものごとがどのようにして行なわれているのかや誰が何を行なっているのかについて、その知識の源となる人々から学んでいる際に行なわれる対話である。第二の対話は、第一の対話で学ばれたことから、IEのエスノグラフィーとして書かれうることがらを組み立てる際に行なわれる対話である。個別的で具体的な人々の経験の記述報告を資源として利用しながら、人々の行為の多様な側面が、個別具体的な個人の経験を超えて広がる社会関係一連係された行為の連鎖一によって組織化されるやり方を可視化するための対話である。二つの対話は、実際の探究において完全に分離されているわけではない。IEの探究は、この二つの対話を行きつ戻りつしながら行なわれる、一連の発見の過程として捉えられている。

「経験」という言葉は、誤解を招く恐れもある。というのもこの言葉は、何かが実際に起こっており進行していた時に、それが話し手にとってどのようなものだったかを実体として指示しているように見えるからである。一般的に、経験とは、それが語られた時より前に起こっているものとして考えられている。しかしIE研究において経験とは、本質的に対話的に生み出されるものとして捉えられている。経験は身体があるところ、感覚的に知っている世界において始まる。しかしそれはいつでも、特定の場面において特定の人々のあいだで、思い出されることが言葉を使って表されるところでのみ生起するものである。この意味で、IE研究は、オリジナルなものの純粋な表象などは存在しないという見方に立っている⁽²⁾。

IEのエスノグラフィーが資源とする人々の経験の記述報告は、インタビューのみならず、フィールドでの参与観察や、研究者が自身に起こったことを振り返ることをとおして得られたものである。それは、何らかの聞き手や読み手に向けて、何らかのやり方で言葉を使って話され書かれ

ることをとおして生み出されている。IEにおいて「対話」という考えは、会話のような何かを意味するが、それは必ずしも対面的相互行為を必要としない。話すこと、書くこと、聞くこと、読むことには、どのような言葉を使用するのか、どのように言葉を結びつけるのか、どのように言葉を組み立てるのかに関する、特定の言語実践の慣習が伴っている。IEのエスノグラフィーが対話的だということは、それが、複数の言語実践一起こっていることを考えるやり方、想像するやり方、話すやり方、書くやり方、見るやり方、注目するやり方—が交差する場であることを意味している。

インタビューに基づくものであれ、観察に基づくものであれ、研究者自身に起こったことに基づくものであれ、IEの研究者は、自他の経験を引き出している。語られていることに対する、IE研究の興味関心に基づいた聞き手や読み手としての反応は、話し手や書き手の記憶がどのように取捨選択されるかを方向づける。第2部で取り上げられる諸概念—「言説」「ワーク」「テキスト」—は、IEの探究の第一の対話の実務に有効に関わっていると考えられているものである。Smithらが強調するのは、IEの研究者たちが探究において役に立つと発見したこれらの概念は、理論的機能を持つものではないということだ。それらの概念は、人々と話すことや観察から学ばれていることを、解釈したり定式化したりするために使用されるものではない。第2部で紹介される諸概念は、自他の経験を引き出している時に、研究者の関心をIEが目指すべきことへ導くのに役に立つものである。第4章から第6章では、IEの研究者がどのようにしてこれらの概念を使ってきたのか、これらの概念がIEの研究者に何を開いてきたのか、IE研究の実例とともに述べられている。

第一の対話において、IEの研究者は、ある特定の出来事の完全に正確な記述報告を得ることには関心がないのだとSmithらは述べる。むしろここで目指されているのは、ものごとがなされるやり方や、それが個人を超えた行為の連鎖とつながれるやり方についての人々の知識を得ることである。IE研究では、具体的で詳細で精巧な記述報告が必要とされる。なぜならば、より多く学ぶほど、そこで述べられていることが特定の記述を超えた諸関係につながれるやり方を、よりよく認識できるようになるからである。したがって、IEの研究者は、人々に具体的な例や記述を求める必要があり、人々が抽象概念から降りて来るように励ます必要がある。以下に述べるIE研究にとっての「役に立つ概念」は、もし適切に使用されるならば、人々の行なっていることのうち、互いの行為を連係しているとは気づかれず認識されないような諸側面に焦点を合わせられるようにする。そして、もし個別的で具体的な人々の経験の記述報告の中に抽象概念が入り込んでしまった場合には、人々が語っているように見えて実際はまだ語られていないことの実例を求めるよう、研究者の注意を喚起するのである。

2. 言説(discourse)

IEの研究者が第一の対話を行なう際に役に立つ概念として最初に取り上げられるのが、言説である⁽³⁾。ここで言説とは、知識の対象を弁別的で差異化されているものとして定式化し認識する、言語を使用する組織化された実践である。言説は、言明を作る、標準化され、一般化され、一般化する形式であり、体系的に産出され、秩序づけられ、統制されている。そして、言説に参加する人々は、そのようにするやり方を他者たちから学んできているのである。IEにおいて言説という概念は、institutional的概念体系を視野に入れ、多くの人々のワークがテキストによって連係される社会関係⁽⁴⁾を認識する道具として使用されている。この概念は、感情を含む人々の行なっていることをテキスト的に連係する、一定の様式を見出す。その様式の中で、人々はアクティブである。

と同時に、その様式は人々を、かれらの個別性を無効にする (override) 諸関係に結びつけるのである。

言説の参加者は、他の参加者が読むためにテキストを作り出している。かれらは、他者たちが書いたものを読み、自分自身のワークにおいてそれらを考慮に入れる。人々は、言説に参加する中でアクティブである。そして、かれらの参加は言説を再生産しそれを変化させる。言説は一例えば本書のような本をとおして一多様なやり方で規制されているが、行為の中の言説のどの瞬間も、言説を再生産しかつ変化させている。私たちは再び次のことを強調する。言説は、実際の局所的場面—職場、会議、ワークショップ、教室、家庭など—に関わりその中でアクティブな、実際の人々の間の諸関係の組織化だ。それらの人々の活動や私たちのワークは、テキスト的に連係されているのである (Smith & Griffith 2022:34)。

知識の対象を弁別的に差異化されているものとして定式化し認識することは、言語を使用する組織化された実践である。そして、私たちはそれを、何かのテキストを書いたり読んだりそれについて話したりする中で行っている。言説の中で、私たちの身体は常に活動しているのだと Smith らは指摘する。

読みながら、自分が読んでいる時にどこにいるかに注目しよう。あなたはあなたの身体がいるところにいる。あなたが読むことの中でテキストを活性化させる時、そのテキストがどんな時間的連鎖を作り出すにせよ、あなたの中あるいはあなたの周りで起こっていることは、あなたが行なっていることや行なっている途中のことの中で、容赦なく継続している。あなたの読みは、まさにそこにある。それは、あなたが何であるかであり、あなたの身体が何を行なっているかであり、時間と空間と場所に状況づけられている・・・読むという行為におけるあなたの身体的存在に注目することは、読むことを、目の動きや、マウスの上の手の動きや、本を持っている手の動きや、ページをめくる動きを含む肉体的行為だと理解することだ。あなたが、意味が何であれ翻訳しながら言葉を認識するやり方において、あなたの脳と目はアクティブだ。あなたが知っている言葉がある。あなたが追える文章がある。あなたが座っているところの快、不快がある。あなたに読むことを可能にする照明や画面の光がある。これら全て、そしてもっとそれ以上のことがある (Smith & Griffith 2022:35)。

テキストを読んでいる時、たとえ一人で黙って読んでいる場合であっても、読み手は「テキスト—読み手の会話」(Smith & Griffith 2022:35)に従事しているのだと Smith らは指摘する。テキストそれ自体も、受動的 (passive) なものではない。テキストは、誰かによって、ある時ある場所で書かれたものであり、執筆、編集、出版、流通などのいくつかのワークの過程の産物である。それを生み出すある時点で、著者(たち)はアクティブに言葉や句や文を選び、議論の順番を決定し、自分が過去に読み自分の研究に含めたテキストを示す引用を書いたのだ。読み手に何かを伝えるために、かれらはこれを特定のジャンルの言説の内部で行ってきた。そして、読み手がテキストに関わりそれを活性化させる時、かれらはテキストが運んでくる言説に関わることになる。そこでは、自分の読むやり方、生活誌、暗黙の知識といったこと全てが、読み手がテキストと関わるやり方の一部になっている。

人々は皆、個別の毎日の生活の中でテキストを読み、聞いている。しかし他方で人々は、例えば、「IEについてのSmithとGriffithのあの本を読んだ?」と言うことができる。このような言い方は、自分たちが「同じテキスト」—新聞、フェイス・ブック、ツイッター、テレビ番組、オーディオ・ブック、推理小説など—を読んでいる、という可能性に基礎づけられている。そこでは、テキストそれ自体は変わらないとみなされている。それは同じ本であり、同じ記事であり、同じポッドキャストであり、同じ映画だとみなされている。テキストのこの「奇妙な特性」は、言説の言語が人々の行なっていることに入り込みそれらを連係するやり方にとって不可欠なものである。

人々はテキストを読み、話し、研究し、書き、考え、議論をしながら、分かち合われたテキストのコミュニティのような何かに関わり、参加している(Smith & Griffith 2022:36)。このテキストのコミュニティは、人々が話し方や書き方を学んでいる、あるいは知っている、弁別的な言語使用実践において連係されている。書いたり読んだりしている時、人々はいつでもアクティブであり、一連の行為の連鎖に参入している。その中で、誰かが言説の言語を使って特定の場所で特定の時間に行なっていることは、他の誰かがその言説の参加者として別の場所で別の時間に行なっていることや行なうだろうことと連係していくのである。言説は、テキストに埋め込まれている。しかし、人々が—例えば考えるために—テキストから離れて、意識を自分の身体の中に定めたとしても、言説は消滅するわけではない。テキストを読んだり書いたりしながら自分の身体の中に入り込んで考えている時、私たちは言説を捨てているわけでも、言説から出て言葉を持たない意識の何らかの単純さの中に逃げ込んでいくわけではないのだとSmithらは指摘する(Smith & Griffith 2022:36)⁽⁵⁾。言説は、頭の中で考えることを含む、人々が身体において行なっていることの中に存在しているのである。

IEで使用される言説という用語は、学問的に基礎を置いたものみに適用されるわけではない。例えば、Paul LukenとSuzanne Vaughanの研究(Luken & Vaughan 2014)では、20世紀初頭の北米で発達した、住宅についての公的な言説(public discourse)が取り上げられている(Smith & Griffith 2022:36-37)。この言説は、子どもを育てるための理想の場所として、一家族居住用の郊外の軒家を促進するものであった。研究は1990年代に、アリゾナ州フェニックスに60年以上住んでいる女性たちに対して、住宅についての経験に焦点を合わせたインタビューを行なうことから始まった。LukenとVaughanは、さらに、子どもの福祉の専門家の仕事から生まれた言説を探索していった。専門家たちは、最良の子育てのために、特定の地域と住宅の物理的条件や家具の装備—「標準的なアメリカの住宅(Standard American House: SAH)」—の重要性を強調した。

LukenとVaughanは、州と提携した3つの機関(agency)が、SAHを確立するために果たした役割にも着目している。これらの機関は調査を行ない、新聞に記事を發表し、パンフレットを作るなどして、親たちを子ども福祉の専門家の視点と結びつけ、住宅の標準を創造し、促進し、それを当時合衆国で広く着手されていた郊外住宅開発のプロジェクトに結びつけていったのである。この研究では、例えばある機関によって作られた小冊子や、郊外モデルと一致する住宅の写真などを再生産する視覚的テキストなども取り上げられている。あるいはまた、合衆国労働省、製材企業、貸付機関、不動産業者、自治体によって支援された、持ち家を促進するためのキャンペーンへ、SAH言説が拡張されてきたことについても述べられている。言説としてのSAHは、人々の活動を連係し、かれらの多様な局所的な状況を組織化過程の一つの共通のまとまりに引き寄せていったのである。

言説はまた、人々の経験としても開かれうる(Smith & Griffith 2022:37-39)。GriffithとSmithは、かれらが「母親業の言説」と呼ぶに至ったものを、人々の生活に潜んでいる存在として発見した(Griffith & Smith 2005, Griffith 2006)。

私たちは、女性たちの母親としてのワークが小学校の教師のワークを補完するやり方についてのエスノグラフィーを展開していくまで、その言説に気がつかなかった。インタビューにおいて、私たちはとりわけ授業日に焦点を合わせた。シングル・ペアレントとして私たちはともに、子どもの学校において「欠陥のある母親」としてステレオタイプ化された経験をしていた。研究の思わぬ副産物として、私たちはこのステレオタイプの存在を、自分自身の生活の中に、そしてまた、「母親業の言説」への自らの参加の中に発見した。私たちは、自分が母親としてのワークについての考え方や感じ方を学んできた特定のテキストや人々を同定できなかった。しかし私たちは参加者として、「シングル・ペアレント」である自分自身をその言葉を使って「欠陥のある母親」として見出すやり方のみならず、自分のワークを定義し評価するやり方も知っていたのである (Smith & Griffith 2022:37)。

研究の過程でGriffithがインタビューしたある女性は、オンタリオ州のStratford祭でどちらのシェイクスピア劇に行くべきかを、(まだ小学生の)子どもを巻き込んで決めていった経緯を話した。彼女の話はGriffithに、自分が「不適切な母親」であるように感じさせた。Griffithは、自分は手抜きをしてきたのだという、大きな罪の意識にさいなまれたという。二人の子どもを持つ、非常にわずかな収入のシングル・ペアレントとして、彼女は子どもたちをStratfordに連れて行くための時間的余裕も金銭的余裕もなかった。ましてや、子どもたちと座って、かれらが今まで見る機会のない様々なシェイクスピアの劇についてじっくり考える余裕などなかった (Smith & Griffith 2022:38)。GriffithとSmithはこのことについて話し合いながら、「しかしなぜ罪の意識を感じるべきなのだろうか?」と自問した。そして、自分たちがある意味で、自分が欠陥のある親と見られるやり方、そして実際自分自身をそのように見るやり方を見つけるよう「あたりを見回していた」ということに気がついたというのである。

私たちは、研究のインタビューを行なう段階がすでに完了するまで、母親業の言説と呼ぶようになったものが目の前にあることや、そのような言説が存在していることさえ気がつかなかった。そのような言説に参加しているやり方を認識できるようになると、私たちは、自分たちが言説を自明視してきたことや、インタビューを組織化するやり方の中に言説を組み込んでいたことを理解できるようになった。ある意味で私たちは、自分たちが話した母親たちもまた母親業の言説の参加者であり、この言説の用語で応答するやり方を知っているだろうと想定していた (Smith & Griffith 2022:38)。

母親業の言説は、公立学校のシステムと結びついていた。そのシステムの中で、登校は法的に規制されており、とりわけSmithらが調査の対象とした小学校のレベルでは、学校は子どもの学校への到着を常に確認していた。Smithらは「授業日」という枠組を使用し、母親たちが子どもを時間通り学校に到着させることに関わるワークを行なうことを自明視しながら、調査を進めていた⁽⁶⁾。Griffithの経験や、母親業の言説についての歴史研究によって、Smithらは、いくつかのインタビューのどこで失敗したかを認識できるようになっていったという。「失敗」したインタビューにおいては、母親業の言説の想定において組み立てられていた暗黙の対話の組織化が、何らかのやり方でうまくいかなかった。Smithがインタビューしたある女性は、インタビュー中に7歳の娘が明らかに理由もなく学校から帰ってきた時、そのことを全く気にしていないようだった。女性は、母

親業の言説の参加者として応答していなかった。そして彼女の応答の仕方は、Smithらはその言説に参加していることを認識していないようだった。Smithらは当時そのことに気がつかず、インタビューは行き詰まりになったのである。

IEが着目する言説とは、局所的な場を横断した人々の活動の関係を可能にする、以下のような弁別的な言語実践の様式である。

- ・言説は、再生産可能なテキストにおける専門化された実践だ。それは、参加者のために共通の世界を構成する。
- ・言説は、アクティブに創造されテキスト的に普及されて、参加者になる人々と関わる。
- ・言説は、人々の諸世界の諸側面を知られたものとして構成し、知識の対象になるものを同定し結びつける概念的秩序を確立する。
- ・言説は、参加者たちのために、言われるべきこと、書かれるべきこと、あるいは、表象されるべきことを組織化する。そしてそうすることの中で、除外も行なう。(Smith & Griffith 2022:39)。

3. ワーク(work)

3-1 ワークとは何か

ここまでの議論で強調されてきたのは、IEのエスノグラフィーが、人々の実際の生活や、人々の行なっていることや、そのための条件や手段や、人々の行なっていることが他者たちの行なっていることと関係するやり方に基づいているということである。エスノグラフィーは、人々の日常の知識を基に組み立てられる。かれらの経験から学びながら、IEの研究者は、人々が行なうことや、人々がそれを行なうやり方を学んでいる。もちろん研究者もまた、自分が見ているものや探しているものについて何らかのアイデアを持っている。研究者の興味関心は、人々が焦点を合わせることへ入り込みそれを組織化する。しかし、IEの探索は、いつでも人々の立ち位置から発展する必要がある。IEは経験の本質的に対話的な特徴を認識し、人々の経験から学びながら、人々がどのようにして直接知られたことがらを超えた社会関係に入れられていくかの手がかりを探すのである。(Smith & Griffith 2022:40)。

IEの研究者たちが探究の過程で依拠できるものとして開発してきた、有効な概念の二つ目はワークである。近代の産業化された社会においてwork(仕事)とは、一般的には、支払われる労働(paid work)を指すものであった。他方、IEの弁別的なワーク概念の使い方は、マルクス主義フェミニストのグループである「家事労働に賃金を(Wages for Housework)」に由来する。このグループは、時間と努力と思考を必要とし特定の物理的関係の条件の下でなされるハウス・ワーク(家事: housework)は、ワークとして認識されなければならないと主張した(Dalla Costa & James 1972)。「家事労働に賃金を」は、ワークという概念を支払われない活動—それは決して、排他的に女性によってなされているわけではない—の全範囲を認識するために拡張したのである。

このようなやり方で理解されたワーク概念は、IEにおいて特に有効な考え方の一つである。Smithらはそれを、「ワークの気前のよい考え方(generous conception)」と呼ぶ。このワークの考え方は、努力と時間を必要とし特定の条件下で行なわれる、人々が意図的に(これは必ずしも、かれらがそれをやりたいと思っているという意味ではない)行なうあらゆることを、エスノグラフィー的に観察可能にする上で役に立つものである。

IEの非常に初期段階でなされた研究の一つ、Marjorie DeVaultの『家族を食べさせる』(*Feeding the Family*) (DeVault 1991)は、有償雇用のモデルとして適用された「ワーク」という言葉の使い方を批判している。この研究は、何人もの親たち—ほとんどは女性たち—へのインタビューに基づいていた。その中でDeVaultは、かれらがどのように家族に食事を与えているかを学んだ。『家族を食べさせる』における議論は、毎日の進行中の考えること、決断を下すこと、買い物へ行くこと、購買すること、調理すること、家族へ食事を提供することを視界に入れているという点で、素晴らしいものだとSmithらは述べる(Smith & Griffith 2022:41)。

そのようなワークには、一般的に自明なこともある。誰かが買い物に行かなければならないし、誰かが料理をしなければならぬし、人々は食べなければならぬだろう。他方、自明ではないこともある。一人の子どもはチーズが嫌いであり、別の子どもはトーストしか食べず、パートナーは野菜があまり好きではなく、自分だけ梨が好きだ、といったことがある。買い物へ行くことはいつなされるのか? 次の買い物まで十分な量の牛乳はあるか、それとも帰宅する途中で店に立ち寄りなければならぬのか? 「スーパーマーケットに立ち寄り必要なものを取りに行く手はずを、自分はいつ整えることができるのか?」といったことがある。

この主観的な次元—考え、感じ、計画すること—の全体が、IEにおけるワークの気前のよい考え方に組み込まれている。調理された食べ物もまた、人々が行なう何かだ。それは特定の瞬間に行なわれ、時間を要することである。病院に行き、医者に会うために待つこともワークである(Smith & Griffith 2022:42)。IEの「気前のよい」ワーク概念は、この言葉の通常の使い方においてはしばしば見落とされたり認識されなくなったりする、人々の行なっていることの諸側面を開くものである。

3-2 局所的な経験から超局所的な社会関係へ

母親が子どもの学校教育との関係で行なっているワークを探索するためにGriffithとSmithが行なった研究(Griffith & Smith 2005)において、ワークという考えは、小学生の子どもをもつ母親たちの毎日の活動を視野に入れるやり方として使用された。学校教育のための母親業の研究を始めた時、Smithらは、自分たちは女性たちの母親業のワークを非常にうまくつかんでいると考えていたという。GriffithとSmithは共に、母親だった。かれらには在学中の子どもがいた。母親として、他の母親たちと子どもや自分自身のことを話す機会があった。GriffithとSmithはこの研究プロジェクトを、お互いにインタビューして、自分がよく知らない領域を発見することから始めた。それから、母親たちのインタビューを開始した。そして実際、自分たちがいかにわずかなことしか知らなかったかを発見し始めたのである(Smith & Griffith 2022:43)。

自分たちの無知には、エスノグラフィーを行なう時に遭遇する単純で典型的な問題もあったとSmithらは述べる。自分にとってあまりにもなじみであるために、注意を払うのを忘れてしまうことがらがある、ということだ。それは例えば、子どもを朝起こして学校に送り出す、というようなことである。GriffithもSmithも、それをどのようにやるかももちろん知っていたし、何が必要とされるかも知っていた。しかしやがてかれらは、母親たちの話す朝のルーティンが皆あまりにも似ていることを、不思議に思い始めたという。それは、起きて、服を着て、朝食を食べて(あるいは、食べずに)、歯を磨いて、靴を履いて靴紐を結んで、上着を着て、ランチを持って、学校に歩いて行くのに間に合う時間にドアを出て、ベルが鳴る前に到着する、というものだった。インタビューした人々から学んだ母親業のワークのルーティンの詳細は、それぞれの家族ごとに異なっていた。し

かし、家族ごとの違いにもかかわらず、これらの朝のルーティンには標準化された到達点があった。それは、子どもを「ベルが鳴る前に」学校に行かせることであった。そのようなことはどのようにして可能になるのかと、かれらは問い始めたのである。

例えば、次のようなデータがあった。

Ms Arthurは、地域の病院で交代勤務している看護師だ。彼女の夫は機械組立工であり、午前6時に仕事が始まる。つまり彼は、時間どおり仕事に取りかかるためには5時半に家を出なければならない。デイケア・センターは少なくとも午前7時までは開かない。学校は8時45分に始まる。Ms Arthurは、早朝勤務で午前7時半まで働いている時、ベビーシッターを雇って午前5時に来てもらい、子どもたちに支度をさせて8時45分までに学校に連れて行ってもらう。ベビーシッターは、親が子どもを時間どおり学校に行かせるというワークを行なえない時に、家族-学校の関係をつなげるために不可欠な存在として雇われている(Smith & Griffith 2022:43)。

Ms Arthurと彼女の夫は、自分の仕事及要求することにも注意を払わなければならない—早朝シフトは、朝早く始まる。かれらの仕事も学校も、互いの要求がかみ合っていないことに注意を払わない。そのような分離状態(disjuncture)に対応するために朝のルーティンを歪めなければならないのは、家族、とりわけ母親であった。

母親によってなされる朝のルーティンの単なる集まりとして考えられてきたことがらが、次第に、労働市場(仕事日)と学校(授業日)の両方によって形作られる連係された活動のセットとして見えてくるようになった。「典型的な授業日」に家庭で行なわれるあらゆる行為は、どこか別の時間別の場所で行なわれる他者たちの行為と連係していた。子どもを学校に行かせるという、母親たちのありふれた朝のワークには、学校という目に見えないパートナーがいた。ベルが鳴る前に時間どおり学校に着く。平日の朝の家族のワークのほとんどは、子どもが学校に時間どおり到着することを目的に、毎朝進行中の行為の多くとそのタイミングを連係していた。

GriffithとSmithらは、子どもを時間どおり学校に行かせるというありふれた朝のワークによって連係されている、家族-学校の関係—institutional関係(Smith & Griffith 2022:44)—を、IEの探索のために開いていった。IEのエスノグラフィーが焦点を合わせる、特定の個人が行なっており経験していることには、いつでも、そのワークを他者たちの行なっていること/ワークとつなげる暗黙の行為の連鎖や連係がある。そのつながりは、IEの研究者が探索することがらの重要な次元である。

3-3 ワークを不可視にする institutional 的言葉

気前のよい意味でのワークという考えとともにひとたび仕事を始めると、研究で自分が学んでいる人々との対話の中に、探すべきだとは自覚していなかった多くのことが見えるようになるとSmithらは指摘する。IEにおける「ワーク」概念は、研究の方向を定めるとともに、見えてくることを組織化する。拡張された気前のよい意味でのワークは、通常は見えなくされている。インタビューを行なう際には、この言葉の通常の意味や経済学や政治経済の意味—賃金のために行なわれる何か—にとらわれずに、人々が行なっている—IEの意味での—ワークについて話してもらうやり方を見つけなければならない。実際、回答者とは「ワーク(仕事)」という言葉を使用しないのが一番よい、とSmithらは言う(Smith & Griffith 2022:47)。というのも、回答者たちはその言葉が、IEの意味でというより、通常やり方で使用されていると理解する可能性があるからだ。

人々にIEの意味でのワークについて話してもらうことをめぐる典型的な問題は、専門家や経営者や行政官とのインタビューで生じる可能性があることとSmithらは指摘する。かれらは教師や、作業療法士や、医者や、店舗の経営者かもしれない。自分が行なっているワークについて話す際、かれらは自分の職業の言葉—その職業のinstitutionalの言葉—を使用する可能性がある。IEにとっての困難は、それらの言語が、人々が実際に行なっていることの詳細には言及していないということである。

例えばGriffithは、ある研究で、オンタリオ州の教師がしばしば生徒を「レベル2の」「レベル3の」と言い表しているやり方に気がついたという。これは、標準化されたテストの4つの到達レベル内部での、生徒のランクに言及するものだった。生徒をこの言説的やり方で言及する時、教師は、テストの点数を上げるために教室での追加の助けが必要な生徒を同定していた。しかし、単に生徒の達成レベルに言及するだけのこのカテゴリの中で、レベル2の生徒と教師が行なう追加のワークは消滅してしまうのである(Smith & Griffith 2022:48)。

institutionalのジャンルの言語は、人々が行なってきたことの具体的な詳細を置きかえる。もし話し手が自分の職業の言語で話す時には、例えば、自分の経験からの例をくれるように、行なわれたことや行なわれる必要があったことをただ記述するように、話し手を励ます必要がある。言説の抽象化を、地上に落とす必要がある。そうすることによって回答者との対話は、IEのエスノグラフィーに最も価値のあるものをもたらしだそうとSmithらは述べる。なぜならば、その対話は、人々が行なっていること／人々のワーク—気前のよい意味での—を、かれらの実際に行なっていることとして、IEの研究者にとってもかれら自身にとっても観察可能にするからである(Smith & Griffith 2022:48)。

4. テキスト(text)

4-1 テキストとは何か

IEのエスノグラフィーは、実際の人々の行なうことや行なっていることについて、エスノグラファーが学んでいることを基に組み立てられている。しかし、記録されたものの中で、人々の行なっていることが個人としてのかれら自身と一致させられるなら、IEはうまくいかないだろうとSmithらは指摘する。IEは、人々が行なっていることが、他者たちの行なってきたことや、これから行なうだろうことと関係するやり方を学ぶために、いつでも個人の活動の先を見ている。特定の個人が自分のワークについてエスノグラファーに話していることは、かれらの直接の経験的な知識を超えた行為の連鎖や関係へのつながりを示唆している可能性がある。IEは、どのようにして人々の実際の行ないが、かれらの生活を征服する社会関係と接続するのかを発見しようとする。IEは実際の人々が行なっていることを学ぼうとするが、いつでも、他者たちの行なっていることと関係するものとしてそれを学ぼうとするのである(Smith & Griffith 2022:49)。

IEにおけるテキストとは、メッセージやイメージや音声を運ぶ(印刷物であれ電子的なものであれ)有形の物質的媒介のことである。IEが目にするのは、テキストが多様な種類のメッセージを運び、人々が行なうことを複数の場と時間を横断して関係するやり方である。ここでテキストは、探究の独立した焦点としては見なされていない。テキストはいつでも、人々の間の行為の連鎖の瞬間としてなされていることをどのように関係するのか、ということに関して認識されているのである。テキストは、人々のワークの一部として一作られ、活性化されながら—それが実際にどのような働いているかということと切り離されるべきではない、とSmithらは強調する(Smith & Griffith

2022:50)。

IEがこのような意味でのテキストに着目するのは、人々のワークの連係の弁別的な形式、すなわち、institution的な大規模な組織の構成要素である支配する諸関係(ruling relations)を可視化するためである。IE研究は、人々のワークがテキストによって／それを通して連係されている時にかれらの実際の活動をたどりながら、支配する関係を人々の毎日の経験の内側から探索しようとするのである。

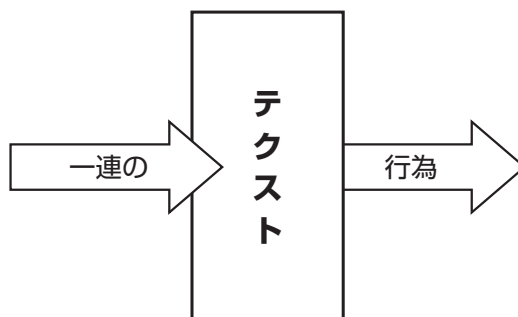


図1 行為の連鎖を連係するテキスト
(Smith & Griffith 2022:52より作成)

IEにおいて社会関係とは、実体的な個人と個人の人間関係というよりは、人々の行為の連鎖や連係に着目した概念である。この点についてSmithらは、George Smithによる次のような定義を引用する。

社会関係という考え方は・・・研究を実施する中で探される(looked for)べきものではない。むしろ、それは探す(looking)ために使われるものだ。・・・この考えは、互いに連結されている諸個人の実践の、行為の過程—そこでは異なる瞬間が互いに依存しており、機能的ではなく再帰的に(reflexively)に互いに連結されている—において、時間的連鎖—その中では、先行することが後続することを意図し、後続することは先行することの社会的特徴を実現あるいは達成する—として話し探究するために、実際的なやり方で使用されている((G. W. Smith 1995:24)、引用は(Smith & Griffith 2022:50))。

IEは、テキストを、実際の行為の連鎖に埋め込まれたものとして探究する。テキストそれ自体は行為しない。それは、行為の連鎖の先行する瞬間と後続する瞬間を連係する時に、個人のワークの中で働くのである。それは例えば、以下のような場面である。

- ・ ミネソタ州ダルースの地区検事は、家庭内虐待の通報に回答した警察によって書かれた報告書を読む。ミネソタ州の法律を念頭に置きながら、担当者は、この報告書がその仕様を満たしているかどうか、したがって、誰かを犯罪で起訴することを自分に要求しているかどうかを判断する必要がある。
- ・ ある学生は秋にランガラ(Langara)カレッジに入学するが、初夏には、自分の取りたい科目の登録をするためにiPadで悪戦苦闘する。

- ・誰かが亡くなった時には、その人が口座を持っていた銀行に伝えるだけでは十分ではない。誰であれ連絡を受けた人は、伝えに来た人に対して、銀行は公式の死亡証明書を見る必要があると言う。
- ・ドロシーはバンクーバーでバスに乗り、コンパス・カードを電子登録機にかざす。
- ・国連の環境交渉に参加している様々な国家の代表は、自分たちの合意を表す最終文書にどんな用語を記載すべきかについて苦慮し、議論している。
- ・大学の学科長が、学科の新しい教授の職務記述書を作成している。学科の意思決定過程に選出された大学院生が、職務記述の策定に参加する必要があるかどうかを知る必要がある。規約についての分厚い本が棚の一番下に置いてある—正しく理解しているか確認するためにそれをチェックしたほうがよい。(Smith & Griffith 2022:51)

警察の報告書、大学の授業の登録画面、死亡証明書、公共交通機関の電子カード、国際会議の合意文書、大学の職務記述書、などがIEの言うテキストである。テキストは、特定の時間や特定の場所で特定の誰かが行なっていることを、別の時間や別の場所で他者たちが行なうこと／行なうだろうことと関係する。テキストを扱う多くの研究において、テキストは、それを働かせる実際の実践とは独立しているとみなされている。しかし前述したように、IE研究においてテキストは、人々の行なっている何か—読むこと、書くこと、視聴すること、聞くこと、あるいはただあるテキストに言及すること—の中で活性化される存在である。テキストは、人々が実際に行なっていることやこれから行なうだろうこととの関係の中で使用される時にのみ、そのような行為の連鎖と切り離さずに取り上げられる必要がある。institutional的に関係するテキストや、それが行為の連鎖に入り込むやり方を見出すことは、テキスト／文書によって関係され協働されたものとしての支配する関係を探索するのに、とりわけ有効なやり方だとSmithらは指摘するのである(Smith & Griffith 2022:53)。

4-2 テキストに関係されたワーク

一つあるいは複数のテキストを不可欠な構成要素として含むような、人々のワークの経験がある。そのような個別具体的なワークの経験から学んでいる時に、IEの研究者は、同時に、研究が次にどこに進むべきかの潜在的な方向性を発見している可能性がある。SmithらはIE研究の実例に依拠しながら、「ワーク—テキスト—ワーク連鎖」で何が起きているかを可視化しようとする際の、いくつかの着眼点を提示する。

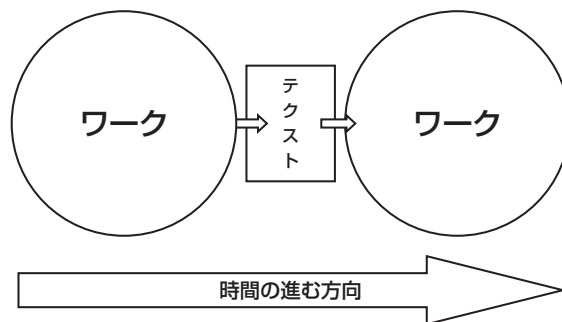


図2 ワーク—テキスト—ワーク行為の連鎖
(Smith & Griffith 2022:53より作成)

(1) 管理のヒエラルヒー

Shauna Janzの研究(Janz 2009)は、ブリティッシュ・コロンビア政府が契約した社会福祉機関に新しい認定手続きが導入された後の、彼女自身のワークの経験の変化と、二人の同僚のテキストに連係された新しいワークについて考察する(Smith & Griffith 2022:53-55)。

かれらは、依頼人とのワークや相互行為を、「よい報告書」を書くための測定可能な要件に合うように再組織化していた。二人の同僚が自身のワークについて話す中で、報告書を依頼人に確認してもらった際の緊張が表面化した。新しい認定手続きが要求する「依頼人中心の計画」の証拠を提供するために、どの報告書にも依頼人のサインが必要だった。二人の同僚は、行動尺度(behavioral measures)を確認する際に依頼人の感情を傷つけることを恐れている、と話していた。かれらは、自分が職員として書かなければならず、その後で共有しなければならない報告書のために、行動尺度を追っていた。かれらの緊張は、報告書を作成するワークの中で起こっていた。職員たちは、依頼人もまたこの報告書を読むだろうことを念頭に置きながら、同時に、「よい報告書」を書くための定量的で測定可能な期待に答えようと苦労していたのであった。

依頼人と信頼関係を築くために、私はよく、報告書を依頼人にただ読んでもらったり私が逐語的に読むのではなく、もっとわかりやすい言葉で再解釈したり言い換えたりした。例えば私は、Tedに「追跡チャートで『4』か『5』の評価がほとんどだったため、適切な行動が前回の報告期間より70%減っていた」と言う代わりに、私たちが行った特定の相互行為を振り返り、彼の社会的相互行為におけるどの行動にさらなるワークや学習が必要かを確認するだろう((Janz 2009:81-82)、引用は(Smith & Griffith 2022:54))。

新しい認定手続きが職員に要請する、個別の依頼人の「追跡チャート」の作成は、職員たちの日々のワークを新たなやり方で連係し組織化していった。依頼人の実際の状態から報告書の求める行動尺度に合致する部分を取捨選択すること、よい報告書を書くことと依頼人を傷つけないことを両立するような書き方を見出すこと、報告書の内容を依頼人に伝える際に信頼関係を損なわないように工夫することなど、これらすべてが、このテキストを活性化させる職員たちのワークであった。

報告書という特定のテキストを含むこれらのワークについての職員たちによる記述報告には、後続する瞬間への暗黙の言及が含まれていた。報告書は、そのようなテキストを集めることに責任を負う人々によって取り上げられ、読まれることが想定されている。このことはIE研究に、さらなる探索の方向性を示唆するものである。Janzの研究からは、依頼者の進捗状況についての報告書を作ることを機関に課す管理命令(managerial order)の一部や、それによって機関の州政府との契約関係やひいては資金調達がどのように再組織化されたかについて、学ぶことができる。テキストを活性化させる職員たちの日々のワークの記述報告は、Smithらが「管理のヒエラルヒー(Smith & Griffith 2022:54)」と呼ぶものについてのさらなる探索を行なうよう、IE研究を方向づけるのである。

(2) 委任された一連の行為(mandated course of action)

Ellen Penceの研究(Pence 2001)の主要な焦点は、ミネソタ州における家庭内虐待事件の司法処理である(Smith & Griffith 2022:55-56)。それはIE研究において、「委任された一連の行為(mandated course of action)」と呼ばれる行為の連鎖である⁽⁷⁾。ここで「委任された」とは、法律、あるいは警察や市の検事(city attorney)や裁判所や刑務所などの組織単位を横断して連係する行為の連鎖に対す

る他の規制の様式、あるいは他の法的罰則(ミネソタ州は、「家庭内虐待」を犯罪化する法を導入した)による、institution 的な承認である。承認されたテキストが、この行為の連鎖の基盤となる。なぜならそれは、局所的な出来事や行動の様々な詳細事項に適用されうる、標準化され標準化する言語で書かれているからである。

一連の行為の連鎖は、緊急通話と警察の対応から始まる。この連鎖の鍵となる契機は、パトロール中の警官が、「家庭内虐待」事件として法的に同定できる可能性のある通話をどのように処理するかであり、かれらの学んだことが、作成される報告書にどのように表象されるかである。Pence はこの報告書について追跡したのは、まず関わった警官による音声録音の書き写しとして報告書が生まれる時点、そしてその後、監督者による確認と承認を経て報告書が公式のものになる時点である。複製されたテキストは、それから、Pence が「処理するやりとり (processing interchanges)」と呼ぶ一連のやりとりを旅することになる。その中で、institution 的秩序における異なる機関のワークが作動し、連係されるのである。

警察隊が報告書を作成する。監督者がそれを確認する。報告書はその後、交通課に行く。そこでは、誰かがそれを「令状(warrant)の要請」として記録する。どのやりとりでも、「家庭内虐待の報告書」というテキストが到達し、局所的なワーク過程に情報を提供し、関連する institution 的地位によって委任された行為に取り入れられる。その後、そのテキストは、委任された連鎖における次の処理するやりとりに渡されていくのである。

ここでは、institution 的に承認されたある特定のテキストが、連鎖の中の異なる現場でなされているワークを連係しながら「移動する」。この移動の過程で、逮捕を行なうための「令状」といったさらなるテキストが追加されていく。「処理するやりとり」の過程でとられた行為が記録される時、報告書として始まるものは、institution 的な「ケース」や「ファイル」になるものの基盤となる。「ケース」は、展開されながら、関連する institution 的言語で書かれたテキストの中で、犯罪で起訴された実際の人物についての institution 的に関連する履歴を表象していくのである。

(3) institution 的境界を横断するワークの連係

Rashmee Karnad-Jani の研究(Karnad-Jani 2015)は、人々のワークを institution 的境界を横断して編み合わせる、テキスト的に秩序づけられた社会関係に注目する(Smith & Griffith 2022:56-58)。Karnad-Jani は、Greater Toronto Area (GTA)において、南アジアの母親たちが子どもの学校教育との関係で求められるワークを探索してきた。この研究が特に焦点を合わせているのは、教育省が中等学校の9年生に進む全ての生徒に求めた科目選択の過程である。以下は、教育省のテキストの要約である。

[親たちは]可能な科目の組み合わせの間の差異を学ぶとともに、科目経路(course pathway)、科目コード、移行に関する様々な用語を熟知する必要がある。親たちはまた、高校入学のための登録用紙を正確に記入することも求められる。そうすることで、子どもは、8年生の教師のクラス・リストに照合の印を入れてもらうことができる。もし用紙の記入を間違えると、教育委員会のウェブ・サイトで用紙を見つけ、ダウンロードして、正しく記入しなければならない。親たちは、様々な科目や経路についての関連する情報を見つけなければならない。もし科目選択に関連して何か質問があれば、子どもの教師や特別教育支援教師(Special Education Resource Teacher)に予約を取らなければならない((Karnad-Jani 2015:9)引用は(Smith & Griffith 2022:57))。

教育省のテキストは、親たちに、官僚的ペーパー(あるいは電子的)ワークを行なうことを求めている。そこでは、かれらが必要とされるノウ・ハウを持っていると、単純に想定されていた。学校の成績が将来の職業機会にどのように関連しているのかを理解する技能や知識が、親たちの間で異なっている可能性は考慮されていなかった。手続きに必要なテキストは、オンラインでしか入手できない。例えば、科目が記載されている地域別科目一覧(Regional Course Directory)が必要だったが、2014年以降、印刷された冊子は廃止されていた。

英語を始めたばかりの親たち、インターネットでの交渉になじみのない親たち、教育的背景が最小限の親たちは、特別の問題を経験することになった。Karnad-Janiはエスノグラフィーを発展させる際に、そのような親たちと一緒にワークしていた。親たちは、書式や科目の選択方法を理解するために、教師や他の親たちに相談した。かれらは、子どもの科目選択のために、相互に依存しながらワークしていた。その選択は、子どもの中等学校での将来の経験を組織化するだろうものだった。親も教師も、すでに忙しいスケジュールの中、この件で必要とされる互いのワークの時間をどのように合わせるか、その方法を見つけなければならなかったのである。

Karnad-Janiの研究は、テキストがinstitution的境界を横断して人々のワークを連係するやり方を可視化した。このテキスト的に統治(governed)された関係は、実質的に、教育省を超え、教育委員会をとって、地域の学校や、教師の毎日のワークへ拡張する。そしてこの教師のワークは、公教育と子どもの関係を管理する親たちのワークと連係されていったのである。

(4) テキストーワークーテキスト連鎖の地図作り

Susan Turner(Turner 2006)は、市の土地開発の「決定」が生み出す超局所的なワーク過程の膨大で詳細な地図を作り上げた(Smith & Griffith 2022:58-59)。Turnerの地図作りは、彼女が自治体からの通知を受け取った時から始まった。それは、彼女の住まいの近所の溪谷に住宅開発が提案されていることを知らせるものだった。「住民」は、自治体の「決定」が下されるだろう評議会の会議に参加するよう招待された。Turnerは評議会の集まりに出席し、それを記録した。その際に彼女は、弁別的なinstitution的言語が話されていることに気がついた。また、「決定」を下す基になるだろうテキストは、テキスト的に連係された(text-coordinated)ワークの連鎖の複雑な履歴を持っていることにも気がついた。そのワークの連鎖には、宅地造成業者、法律家、銀行、不動産会社、住民、政府の役人、測量士のワークが含まれていた。

Turnerは、「決定」という言葉をイタリックで強調した。それは、政府の行動を記述するこのありふれた言葉使いが、IEが観察可能にしようとすることを覆い隠すやり方に言及し続けるためであった。「決定」というinstitution的な言葉に包摂され覆い隠されてしまうのは—そしてTurnerが地図作りで可視化しようとするのは—テキストを読んだり、書いたり、それについて他の人と話したり、他の人が確認するためにテキストを送信したり、送られたテキストを確認したりなどのワークを人々が行なっている、複雑な行為の連鎖であった。ワークーテキストーワークの連鎖としてのinstitutionsの地図は、組織構造の図表のようなものとは異なっている。むしろそれは、承認されたテキストに基づいた日々のワークや局所的な言説実践が、どのようにしてある機関の動的な進行中の活動を産出し形成しているかを可視化しようとするものなのである。

5. おわりに

はじめにでも述べたように、IEは、人々の日常的な経験である局所的な世界の中から発展し、局所的な場を横断して人々の活動を連係する社会関係や社会的組織化を探索し、私たちの日常生活に深く関わっている権力の作動を解明しようとする。エスノグラフィーを開発する第一の対話では、ものごとがなされるやり方や、それが個人を超えた行為の連鎖とつながれるやり方についての人々の知識を得ることがめざされる。ここでは、具体的で詳細で精巧な記述報告が必要とされる。個別具体的な個人の経験についてより多く学ぶほど、そこで語られていることがどのようにして特定の記述を超えた諸関係につながられているのかを、よりよく認識できるようになるからである。言説、ワーク、テキストというIE研究にとっての「役に立つ概念」は、第一の対話における研究者の注意を、人々の行なっていることのうち、互いの行為を連係しているとは気づかれず認識されないような諸側面に向けるための道具である。

IEは、institution 的概念体系を視野に入れ、多くの人々のワークがテキストによって連係される社会的関係を認識しようとする。人々はテキストを読み、話し、研究し、書き、考え、議論をしながら、分かち合われたテキスト的コミュニティのような何かに関わり、参加している。そこにおいて人々のワークは、かれらが話し方や書き方を学んでいるあるいは知っている、弁別的な言語使用実践によって連係されている。IEは、感情を含む人々の行なっていることを、テキスト的に連係する一定の様式に注目する。その中で、人々はアクティブである。と同時にその様式は、人々を、かれらの個性を無効にする institution 的に連係された行為の連鎖に結びつけるのである。

言説は、人々が実際に行なっているワークの具体的な詳細を包摂し、抽象化し、置き換える特定の言語—institution 的言説の言語—の使用を伴っている。それらの言葉は、言説の参加者たちのために、言われるべきこと、書かれるべきこと、表象されるべきことを組織化する。そしてそうすることの中で、除外も行なう。それは必ずしも学問的に基礎を置いた専門用語であるとは限らず、「住宅」「シングル・ペアレント」「授業日」「決定」などの、ありふれた言葉づかいである可能性がある。もはやそのような言語使用実践をどのようなテキストや人々から学んできたか具体的に特定することが難しくなるほど、言説が浸透し、人々の日々の経験に組み込まれている可能性もある。

言説の言語は、言説に参加している人々によって、直接口にされたり意識されたりするとは限らない。例えば「授業日」という言葉の使用は、子どもを朝起こして学校に送り出すという毎朝のルーティンを遂行するために各家庭で進行中の、個別具体的な様々なワークの組織化とともにある。その詳細はそれぞれの家族ごとに異なっているにも関わらず、これらの朝のルーティンには標準化された到達点があった。このようなことはいかにして可能になるのか、という問いがIE研究の出発点となる。典型的な「授業日」に家庭で行なわれるあらゆるワークは、それを行なう人々たちにとってはあまりにもなじみであるために、注意を払うのを忘れてしまうようなことがらである。しかしかれらのワークは、暗黙的にも明示的にも個人を超えた行為の連鎖とのつながりを持っている可能性がある。

このようなワークは、「授業日」などの institution 的言説の言語によって一括りにされ、抽象化されて通常は見えなくされている。言説の言語は、人々が行なってきたことの具体的な詳細を置きかえる。それゆえIEの第一の対話においては、語り手が institution 的言説の言語を使って記述していないか、そして研究者自身がこのような言語の使用の仕方を自明視していないかを常に点検する必要がある。その上で、例えば、自分の経験からの例をくれるように、行なわれたことや行なわれる

必要があったことをただ記述するように、語り手を励ます必要がある。SmithやGriffithの研究(Smith & Griffith 2005)のように、自らの経験に基づいたIE研究を行なう場合には、自らの記憶を取捨選択しながら起こったことを語るという言語実践と、IE研究の興味関心に基づいた反応を行なうという言語実践を、一人二役で遂行することになるだろう。

印刷物であれ電子的なものであれ有形の物質的媒介としてのテキストは、多様な種類のメッセージを運び、人々が行なうことを複数の場と時間を横断して連係する。IEのエスノグラフィーは、ワーク-テキスト-ワークの連鎖において何が起きているかを可視化しようとする。IE研究において、テキストは、探究の独立した焦点とはみなされていない。そうではなく、常に人々のワークの一部として、それが実際にどのように働いているかということと切り離さずに認識され、探究される。IE研究は、とりわけ、様々な公的機関を横断し人々の日々の生活に入り込む「institution的に承認された」テキストに着目してきた。そのようなテキストは、それを活性化しながら行なわれる人々のワークを標準化、一般化されたやり方で組織化し、超局所的に連係する力を持つ。人々の活動や、拡張される一般的な社会関係を、局所的で個別的な現場において産出し組織化する力である。この力の作動するメカニズムを、人々のワークがテキストによって／それを通して連係されている時に、かれらの実際の活動をたどりながら、かれらの毎日の経験の内側から可視化することが、IEのエスノグラフィーの第二の対話の課題となる。

注

- (1)第1部は、上谷(2023)を参照。
- (2)この点についてはSmith(2005)第6章も参照。
- (3)初期の研究においては「イデオロギー」という概念が使用されていたが、その後Michel Foucaultに依拠した「言説」が有効な代替となった。この点については、例えば、Smith(1974)、Smith(1990a:30-57)も参照。
- (4)IEにおけるワーク(work)、テキスト(text)、社会関係(social relation)という概念の意味については、後述する。
- (5)この点についてはSmith(2016)も参照。テキストを読むという実践の経験的エスノグラフィーがどのようにして実施されるのかについては、Smith(1990a)(1990b)(1999)、Smith & Turner(2014)を参照。
- (6)この点については上谷(2019)も参照。
- (7)この点についてはGeorge Smith(1988)を参照。

文献

- DeVault, M. L.(1991) *Feeding the Family : The Social Organization of Caring as Gendered Work*.
- Dalla Costa, M., & James, S.(1972) *The Power of Women and the Subversion of the Community*. London : Falling Wall Press.
- Griffith, A. I.(2006) Constructing Single Parent Families for Schooling : Discovering an Institutional Discourse. In D. E. Smith(ed.) *Institutional Ethnography as Practice*, pp. 127-38. Lanham, MD : Rowman and Littlefield.
- Griffith, A. I. & Smith, D. E.(2005) *Mothering for Schooling*. New York : Routledge.
- Janz, S.(2009) Accreditation and Government Contracted Social Service Delivery in British Columbia : A Reorganization of Front-line Social Service Work. Unpublished MA Thesis, Victoria, BC : University of

Victoria.

- Karnad-Jani, R. (2015) Silent Voices : “South Asian” Mothers and Transition to High School : A Decolonizing Institutional Ethnography of Mothering Work. Research paper submitted to the University of Toronto Faculty of Graduate Studies for competed of MEd degree.
- Luken, P. C., & Vaughan, S. (2014) Standardizing Childrearing through Housing. In D. E. Smith and S. M. Turner (eds.) *Incorporating Texts into Institutional Ethnographies*, pp.255-304. Toronto : University of Toronto Press.
- Pence, E. (2001) Safety for Battered Women in a Textually Mediated Legal System. *Studies in Cultures, Organizations, and Societies*, 7(2), pp. 199-229.
- Smith, D. E. (1974) The Ideological Practice of Sociology. *Catalyst*, 8(Winter), pp.39-54.
- — — (1987) *The Everyday World as Problematic : A Feminist Sociology*. Toronto : University of Toronto Press.
- — — (1990a) *The Conceptual Practices of Power : A Feminist Sociology of Knowledge*. Boston : Northeastern University Press.
- — — (1990b) *Text, Facts, and Femininity : Exploring the Relations of Ruling*. London : Routledge.
- — — (1999) *Writing the Social : Critique, Theory and Investigations*. Toronto : University of Toronto Press.
- — — (2005) *Institutional Ethnography : A Sociology for People*. Lanham, MD : Altamira Press.
- — — (2016) Exploring Words as People’s Practices. In J. Lynch, J. Rowlands, T. Gale, and A. Skourdumbis (eds.) *Practice Theory and Education: Diffractive Readings in Professional Practice*, pp.23-38. London : Routledge.
- D. E. Smith and S. M. Turner (eds.) (2014) *Incorporating Texts into Institutional Ethnographies*. Toronto : University of Toronto Press.
- Smith, G. W. (1988) Policing the Gay Community : An Inquiry into Textually Mediated Relations. *International Journal of Sociology and the Law*, 16, pp.163-183.
- Turner, S. M. (2006) Mapping Institutions as Work and Text. In D. E. Smith (ed.) *Institutional Ethnography as Practice*. pp.131-162. Lanham, MD : Rowman and Littlefield.
- 上谷香陽 (2019) 「ドロシー・スミス Institutional Ethnography におけるワークおよびワーク・ノレッジ概念の検討」『文教大学国際学部紀要』30(1)、pp.1-16. 文教大学国際学部。
- — — (2023) 「インスティテューショナル・エスノグラフィーとは何か—*Simply Institutional Ethnography* を読む(1)—」『文教大学国際学部紀要』33(2)、pp.1-17. 文教大学国際学部。